



日本ラテンアメリカ学会 会 報



AJEL

2010年3月31日

AJEL

No.101

1. 理事会報告
2. 研究部会活動報告
3. 研究部会開催案内
4. 事務局から

1. 理事会報告

○第128回理事会

日 時：2010年2月11日(木)

14:00～16:45

場 所：東京外国語大学本郷サテライトオフィス

出席者：二村、星野、村上、飯島、浦部、
狐崎、石橋、岸川、谷、落合、小池、田中（書記）

欠席者：なし

<報告事項>

- (1) 第31回定期大会の準備状況
 - ・2010年6月5日(土)、6日(日)に京都大学(京大会館)で開催、26の報告と6パネルのほか、記念講演を企画しているとの報告(村上理事・実行委員長)。
- (2) 理事選挙
 - ・第1回選挙管理委員会にて互選により、委員長に清水達也会員が選出され、4月に投票用紙を郵送し、投票結果の主要部分を、学会ホームページに掲載する予定(二村理事長)。
- (3) 研究部会
 - ・昨秋の研究部会開催報告と春の研究部会

開催予定について、東日本部会、中部日本部会、西日本部会の各担当理事より報告(浦部、田中、村上理事)。

- ・部会の報告資格について、発表の時点で非会員であっても、会員になる予定であれば有資格とすることを確認。

(4) 『年報』第30号の編集状況

- ・14本の投稿原稿があり、そのうち6本が2次審査に進んだとの報告(飯島理事)。
- ・採否の基準、論文と研究ノートの扱い、未熟な投稿原稿などについて意見交換。

(5) 『会報』

- ・第100号発行の報告。データベース化と印刷発注先の変更など(狐崎理事)。

(6) 学術会議

- ・地域研究学会連絡協議会(JCASA)のWEB版への原稿依頼、学会誌へのアンケートの回答、若手研究者競争資金の削減案への反対要請文への本学会の協賛、来年度も引き続き幹事学会継続依頼について報告(二村理事長)。

(7) 会計

- ・当初の計画に収まるかたちで予算執行しており、繰越金については、現状維持しているとの報告(星野理事)。

(8) メーリングリスト

- ・運営委員の交代、ホームページのバージョンアップとデジタル写真の活用などについて報告(岸川理事)。

(9) 国際交流について

- ・本学会若手支援制度申請書案について報告、調整のうえ了承(石橋理事)。

(10) 事務局

- ・年会費徴収状況報告（谷理事）。
- ・入会希望8名、退会希望2名（谷理事）。

<審議事項>

- (1) 8名の入会と2名の退会が承認された。
- (2) 学会著作権ポリシーに関する筑波大学図書館からのアンケートに対し、『研究年報』に掲載された論文についてのみ公開を認める旨の回答を行うことに決定した。
- (3) ハイチ大地震に関し、いくつかの大学に理事長名でお見舞いのメールを出すことを合意。大学リストについては、石橋理事からハイチを専門とする会員に問い合わせることに決定した。
- (4) 次回理事会を、2010年6月5日（土）12:00～14:00に京都大学京大会館にて開催することに決定した。

2. 研究部会活動報告

《東日本部会》

2009年12月19日14時から17時30分まで、早稲田大学早稲田キャンパスで開催。3名の報告者を含む13名の参加者の間で活発な議論が展開された。

今回の発表はいずれも各報告者が継続的に行ってきた現地調査に基づく中身の濃い研究であった。村瀬報告はチリにおける小規模農家の発展を実証的に論じたものである。会場からはラズベリー以外の作物にも応用可能かとの趣旨の質問があったが、今後もラズベリー生産の推移を追跡し、他の地域や他の作物に対しても示唆を与えるような研究に発展させてもらえればと思う。ストリート・チルドレンに関する報告を重ねている小松会員の今回の報告は、複数のストリート・チルドレン集団を出入りする個人を媒介として集団間のネットワークが

構成されていることを説明したものであった。基本的事柄を毎回の発表で繰り返す必要はないので、中心的な題材についての説明に力点をおき、また個々の発表が自分の研究全体の中でどういう位置付けをもつかを明確に提示してくればよいのではないかと思う。杉田報告はエクアドルの1人の青年リーダーの行動を追跡している点で興味深い内容であった。会場からの指摘にもあったとおり、多文化主義や信頼社会といった用語の概念なり定義なりを明確にすれば、研究対象とされている共同体、さらにはエクアドルが直面している問題がより明瞭になるように思えた。以下は報告者自身による要旨である。（浦部浩之：獨協大学）

- 「チリの非伝統的農産物輸出拡大過程における小規模農家像の再考察—中南部ラズベリー生産農家の事例から」

村瀬幸代

（上智大学イベロアメリカ研究所準所員）

本報告では、チリの非伝統的農産物輸出の一例として、小規模農家の輸出チェーンへの参入が注目を集めてきたラズベリー輸出の事例を取り上げ、その参入を促してきた要因および参入の持続性について、2009年2～3月に実施した現地調査の成果を踏まえた考察を行った。ラズベリーが経済的・技術的に参入障壁の低い作物であったことや、1990年代に公的支援が拡大したことなど、農家を取り巻く所与の条件が変化したことに加え、家族労働の利用による労働力コストの節約をひとつの強みに、企業を介した市場との結びつき・政策支援利用による政府との結びつき・農家同士の水平的な連携など、小農が多角化したチャンネルを通して競争力の維持・向上に取り組んできたことが明らかとなった。そういった小農の主体的側面からは、農業生産者としての存続がしばしば悲観視されてきた小農に

ついて、新たな発展可能性を見出すことができる。

○「メキシコ市におけるストリート・チルドレン集団のネットワーク」

小松仁美（淑徳大学・院生）

メキシコ合衆国首都 DF において、ストリート・チルドレンが社会問題化して 60 年以上が経過する。親からの保護を必要とする子どもたちは路上において生き抜く上で、集団を形成し、身を寄せあい、助け合って生きてきた。子どもたちの数の増加およびドラッグの蔓延などに伴う生活環境の悪化により、今日ではストリート・チルドレンは集団を形成するのみならず、複数の集団間において緩やかなネットワークを築き上げている。このネットワーク内においては他の集団の構成員に関する情報交換が行われており、子どもたちはネットワーク内のどの集団にも出入りが自由に行え、たとえばある集団から出ざるを得なくなっても他の集団に即座に入ることができ、安全が確保できるようになっている。本部会においては、2001 年より行ってきた参与観察と聴き取り調査に基づき、この集団間のネットワークの全体像を集団の構成員の役割に注目しながら、報告した。

○「バストン・デ・マンドを渡さなかった男—エクアドル、シエラノルテの共同体に見る多文化国家に向けての挑戦—」

杉田優子（東京大学・院生）

報告者は 2008 年よりピニシオ・キロという青年への継続的なインタビューと、調査を行ってきた。ピニシオ・キロはエクアドルのカヤンベ郡にあるコムニダ、ラ・チンパで活動する青年リーダーである。彼は高校進学をきっかけとして地域を出て行ったが、家庭の事情によって 2002 年に再び戻り、コムニダで人々のよき生活（buen

vivir）を取り戻すために悪戦苦闘してきた。2009 年の 8 月に、コレア大統領就任に関連する儀式がカヤンベで行われ、彼はバストン・デ・マンド（権力のバトン）の受け渡しを依頼され、断った。本報告は、エクアドルの政治、社会的背景から彼の闘いの過程を捉え直そうとするものである。この作業を通して、エクアドルの多文化国家としての現状を一つの地域の視点から分析し、そこに住む人々の「先住民性」の再主張と「経済発展への先進技術」の利用あるいは「民主主義」の模索という、異種混濁的な取り組みに、地域の発展の一つの可能性を見出した。

《中部日本部会》

2009 年 12 月 12 日（土）13:00 から 17:00 まで、中部大学名古屋キャンパス 6 階、601 講義室において、中部日本部会研究会が開催された。研究報告は 4 名で、参加者は 11 名であった。4 件の報告はいずれもホットな話題を扱ったもので、そのうち 2 件は歴史学、人類学系、あとの 2 件は政治学系の報告であった。

河邊報告はメキシコのワステカ地方で死者の日に踊られる「Viejos の踊り」に関する最新の調査結果の中から、観光客のまなざしが「伝統」の再創造と地域住民のアイデンティティ強化を促している状況を紹介したものである。川田報告はメキシコのミチョアカン州プルアラン村で計画されている「独立 200 年記念 2010」のための活動に関する調査をきっかけとして、「反乱軍が掲げた旗」という視点からメキシコ独立運動を見直そうとしたものである。田中報告は 2009 年 11 月に実施されたホンジュラス大統領選挙を、選挙監視員として現地で観察してきた最新の情報とともに、その結果を巡ってラテンアメリカ諸国が親米・反米に仕分けられてゆく状況を解説したもの

である。富田報告は2009年にメキシコで発生したとされる新型インフルエンザの初期の感染拡大のあり方を、「自由貿易」、「政治的・市民的自由度」、「経済発展」という観点から分析したものである。

今回の報告はいずれも最新の調査をもとにした報告であったため、研究としては今後のさらなる発展が期待されるものの、部会全体としてはバランスのとれた、内容の濃い有意義な議論ができたと思う。以下は報告者自身による発表要旨である。

(杓谷茂樹：中部大学)

○「『伝統』の見せ方と民衆的实践の現状—メキシコ・ワステカ地方の Xantolo を手掛かりとして—」

河邊真次（南山大学ラテンアメリカ研究センター非常勤研究員）

本報告では、イダルゴ州ワステカ地方の死者の日（Xantolo）に焦点を当て、当該地方の「伝統」とされる民族舞踊集団 Viejos に関して、従来の民族誌等に見られる踊りのプロセスおよびその社会的意味の通時性と変化の様態を分析した。また、新たな視座として、祝祭に馳せ参じる観光客の「まなざし」を考慮に入れ、とりわけ都市部と村落との間での踊りの実践の違いと、観光客に向けた地域住民の「伝統」の演じ方について考察した。当該地方では、市当局が企画する Xantolo イベントの中に、より「伝統的なもの」を追求するための仕掛けが織り込まれる一方で、イベントに参画する地域住民もまた、観光客との出会いの場でより「伝統的なもの」を再創造することに熱意を注いでおり、そこには両者の「共犯関係」が見出される。他方、地域住民にとっては、これらのイベントが自らのアイデンティティを強化する機会にもなっており、その意味で、観光客の「まなざし」が、当該地方の祝祭実践に大きく影響している

といえるのである。

○「『反乱軍が掲げた旗』から見えるメキシコの独立運動」

川田玲子（名古屋短期大学非常勤講師）

本報告の主要テーマである「反乱軍が掲げた旗」の調査は、メキシコ「独立運動の歴史」考察の手がかりとして始めたものである。本報告では、調査のきっかけとなった出来事、ミチョアカン州プルアラン村の「独立200年記念2010」のための活動を紹介するとともに、近年の研究動向に触れることとした。研究動向では、INHA 所属の研究員マルタ・テランとミチョアカン州立大学のモイセス・グスマンの研究—独立運動前半（1810年から1815年まで）に掲げられた反乱軍の旗に関する—を中心に話を進めた。報告の要点を「反乱軍旗の図柄の変遷」と「旗から見えるメキシコ独立運動の特性」という二点に絞り、最初に、各旗が考案された時期あるいは考案直接関係者などに関する新事実、次に、メキシコの独立運動におけるカトリック性について言及した。最後に、メキシコ独立運動の歴史に関する更なる研究の必要性を示唆した。

○「ホンジュラス大統領選挙（2009年11月29日実施予定）選挙監視員現地報告」
田中高（中部大学）

09年6月28日、現職の大統領が軍により強制国外追放されたホンジュラスで、予定通り総選挙が実施された。その結果国民党（PN）のポルフィリオ・ロボ・ソナが次期大統領に選出された。筆者が現地で見えた範囲（首都テグシガルパ近郊に限定されるが）では、選挙自体は平穏に終わった。また投票率も前回（05年）よりも5%程度は増加している。新政権を承認するかどうか、国際社会、特にラテンアメリカの反米左派政権と親米政権との間で対立している。

ベネズエラとブラジルが、選挙そのものの合法性を認めず、ロボ政権の発足に強硬に反対し、コスタリカ、コロンビア、メキシコなどは承認する予定である。今回の「クーデター」と選挙後の一連の動きは因らずも、ラテンアメリカの親米、反米政権の仕分けをする機会となった。セラヤ前大統領の去就も含めて、これからの動きに注目したい。なお必読の参考文献として林和弘「ホンジュラス・「クーデター」」『ラテンアメリカ・レポート』第26巻、第2号、2009年がある。

○「政治経済的側面から見た新型インフルエンザの感染拡大」

富田与（四日市大学）

米国の歴史学者クロスビーによるスパニッシュ・インフルエンザの研究を手がかりに、「自由貿易」、「政治的・市民的自由度」、「経済発展」と感染確認国の拡大と関係をフェーズ6以前の状況について検討した。最初はメキシコからの感染流出が多く、メキシコとFTAを締結した国で感染が広がった。その後米国からの感染流出が増加したが、ここではFTAとの関係は希薄であった。自由度については、比較的自由でない国で発生した後、まず比較的自由な国々で感染が広がり、その後比較的自由ではない国々に拡大した。経済開発については、上中所得国で発生した後、まず高所得国で感染が広がり、次第に上中所得国、下中所得国や低所得国に拡大した。ラテンアメリカ地域への拡大は「比較的自由ではない国への感染拡大」、「上中所得国および下中所得国への感染拡大」の時期と重なった。

《西日本部会》

2010年1月30日（土）、京都大学地域研究統合情報センターにおいて開催された。4名の報告者と12名の参加者の間では、活発な議論・質疑応答が行われた。今回は、

報告対象地域がブラジル、メキシコ、ホンジュラス、ペルーと多様性に富んでいたことに加え、歴史、政治、文化、および現状分析を含む多方面からのアプローチによる研究成果が報告され、ラテンアメリカ地域研究ならではの学際色が強い、有意義な研究会となった。

最初の高橋報告は、ブラジルのヴァルガス政権は、1937年に発足した「新国家」体制の下、異人種間の融合・統合を表象するものとしてサンバを利用し、ブラジル国内および対外的にナショナル・アイデンティティを誇示することを試みた点を説明した。サンバという大衆音楽を通してヴァルガスの国民統合政策を読み解く意欲的な研究成果には、多数の質問が寄せられた。「民族」と「国民」という厳密には異なる2つの概念の整合性、「異人種の混淆」の評価、現代のサンバとの違い、サンバに対する検閲の詳細について、掘り下げた議論が展開された。

次の森口報告は、メキシコのカルデナス大統領が行った近代化改革は支持を得た一方で、彼の至上命題であった国民統合に成功しなかった一因を、社会主義教育政策を事例に説明した。具体的に、カルデナスの唱える「社会主義」が曖昧なまま、教育現場への実践に移されたことが、ナショナリズム・アイデンティティーの普及を妨げたことが強調された。同報告が提示する、やや挑戦的な命題には多方面からの質問およびコメントが提示された。国民統合の失敗とする捉え方の妥当性、バスコンセロスの思想とカルデナスの理念との関連性、カルデナスの教育政策はそれまでカトリック教会が有していた力を排除する近代化の試みと解釈すべきでは、等の論点が示され、今後の課題として指摘された。

続く林報告では、昨年に国際社会の耳目を集めたホンジュラスのクーデターの背景

説明、および新政権の抱える課題が提示された。セラヤ前大統領の急進化の要因、セラヤによる憲法制定議会召集が支持を得られなかった理由、および2009年6月28日クーデター後の国際社会の反応について、当時の専門調査員という立場からの独自の視点で踏み込んだ分析が紹介された。石油収入に支えられたベネズエラのチャベス政権とは異なり、バラマキに必要な資金が不足しているため、セラヤは政治的支持を得られず、クーデターにより失脚することに至ったとの解釈、および2008年予備選挙の選挙監視にかかわった米州機構(OAS)が、域内各国の大半が不承認の立場を堅持した2009年11月総選挙プロセスでいかなる立場を見せたか等について、活発な質疑応答がなされた。

最後の真鍋報告では、ペルーの中央セルバにおける無秩序・貧困問題についての歴史的考察が紹介された。歴代政権は、セルバ地域の社会経済問題の解決に積極的に関与してきたとは言いがたく、また研究も少ないが、同地域に見られる深刻な貧困問題こそが、ゲリラの勢力拡大、ひいては日本大使公邸占拠事件の重要な背景として認識されるべきである、との主張が展開された。ペルーにおける先住民問題考察の留意点、中央セルバの原住民とその社会に関する特徴、そして1940年代以降の政治的急進化、農地改革の成果の歴史が紹介された。ココ栽培と反政府武装集団の拡大の関係、農地改革の評価、先住民アシャニンカの組織化の動き、「無秩序と貧困」の直接的要因について、活発な議論が行われた。

以下は各発表者から提出された要旨である。
(高橋百合子：神戸大学)

- 「ヴァルガス政権とサンバー音楽を利用したナショナル・アイデンティティ形成」
高橋亮太

(京都外国語大学大学院博士前期課程)

政治史の観点から、近代国家ブラジルの形成過程に国民音楽が果たした役割について考察する。ヴァルガス期以前は周縁的な存在であったサンバが、ナショナル・アイデンティティを表象するに至った経緯を検証したい。

- 「カルデナスの社会主義教育に見るメキシコ革命のナショナリズム」

森口舞(神戸大学大学院博士後期課程)
革命後のメキシコ社会の統合を目指していたカルデナス大統領だが、彼のナショナリズム・イデオロギーは、国民の共感を得ることはできなかった。教育政策に注目し、キューバの事例との比較を参考にしながらその背景を考察する。

- 「ホンジュラス『クーデター』：事態の背景と進捗状況」

林和宏(愛知県立大学客員研究員)
昨年6月末にホンジュラスで発生したクーデターの経緯及び原因につき分析した。セラヤ大統領の目指した新憲法制定は、後の暫定大統領・ミチュレティ国会議長、司法等との対立の契機となり、クーデターの主因となる。

- 「ペルー・中央セルバの無秩序・貧困問題の歴史的考察」

真鍋周三(兵庫県立大学)
本報告では、ペルー・中央セルバの歴史研究の重要性を指摘したい。セルバにおける原住民系の人々をとりまく社会環境の悪化、とくに無秩序・貧困問題について、先スペイン期からアシャニンカを主とする人々の居住空間であった中央セルバ地域に焦点をあてて歴史的観点から述べる。

3. 研究部会開催案内

下記のように各研究部会の研究会が開催されます。皆様、ふるってご参加ください。

《東日本部会》

◆日時：2010年4月3日（土）

14:00～17:30

◆場所：獨協大学（埼玉県草加市）1棟
103教室（最寄駅：東武伊勢崎線
松原団地駅）

◆発表者・発表題目

（※各発表者の所属は申し込み時点）：

1. 山田美雪（東京大学・院生）
「マヌエル・プイグー遍在する慈愛の母—」
2. 仁平ふくみ（立教大学・院生）
「名づけられない場所から語る—『ペドロ・パラモ』の声をめぐって—」
3. 井堂彰人（上智大学・院生）
「ユカタン・マヤ地域における養蜂文化—その通時的研究—」
4. 高橋慶介（一橋大学・院生）
「土地の占拠と「個人主義」：ブラジル北東部バイーア州におけるMSTの展開をめぐって」

◆連絡先：浦部浩之 urabe@dokkyo.ac.jp

《中部日本部会》

◆日時：2010年4月10日（土）

13:00～17:00

◆場所：中部大学名古屋キャンパス510講義室（JR中央本線 鶴舞駅名大病院口（北口）下車すぐ）

◆発表者・発表題目：

1. 寺澤宏美（名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程後期）
「スペイン語新聞は『危機』をどう扱ったのか—エスニック・メディアの役割—」

2. 田中京子（名古屋大学留学生センター）
「日本留学の長期的成果—ラテンアメリカ出身者の場合—」

3. 杉山和子（東海大学 /4月より、愛知学院大学）

「アルゼンチンにおける移行期正義と人権問題に関する先行研究と今後の研究課題」

4. 林和宏（愛知県立大学客員研究員）

「チャベス政権以前ベネズエラにおける市民社会の一考察：住民運動の分析を手がかりに」

5. 中川智彦（中京学院大学）

「現地報告：チリ政権交代と震災直後のサンティアゴ」

◆連絡先：中川智彦

m-nkgw@chukyogakuin-u.ac.jp

杓谷茂樹

shakuyas@isc.chubu.ac.jp

《西日本部会》

◆日時：2010年4月10日（土）

14:00～17:00

◆場所：京都大学地域研究統合情報センターセミナー室（稲盛記念館2階213号室）

◆発表者・発表題目：

1. 高橋亮太（筑波大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程）
「ヴェルガスの対外政策—「新国家」体制樹立から連合国参戦まで—」
2. 武田由紀子（神戸市外国語大学非常勤講師）
「メキシコ・チアパス州における宗教集団間の摩擦：ミツイトン村における暴力事件の背景と報道」
3. 高橋百合子（神戸大学大学院国際協力研究科）
「メキシコ・サリーナス政権下の全国連帯計画（PRONASOL）再考：クライア

ンテリズムか？近代化計画か？」

4. 村上勇介（京都大学地域研究統合情報センター）

「ペルーの政軍関係に関する一考察」

◆連絡先：高橋百合子

ytakahashi@people.kobe-u.ac.jp

4. 事務局から

- ・所属・住所等に変更が生じた場合は、速やかにその旨、事務局までご連絡ください（会費の払込票に新住所を初めて記載される場合には、念のため「通信欄」にその旨お書き添えくださると助かります）。なお、その際、個人情報保護の観点から、『会報』掲載への可否を必ず付してご連絡ください。
- ・年度替わりに当り、ご所属が変わられる方も多くいらっしゃると思います。特に学籍を失われる方については、その旨すみやかに事務局までお知らせください。
- ・本学会メーリングリストに登録されているメールアドレスに変更があった際にも事務局までご連絡ください。戻ってくるメッセージが多数見受けられますので、よろしくご協力のほどお願いいたします。
- ・新規にメーリングリストに登録をご希望の方も、メールアドレスを添え事務局までお知らせください。

I. 会員関係

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

Ⅱ．会員の仕事など（事務局宛送付分）

- 米田博、米田清「イシブラスの撤退：定性分析の圏論による整理」『福岡大学経済学論叢』第54巻第1・2号（2009年9月）、1～67頁。
- 桜井敏浩「アンデス メソアメリカ関係の本」『Chaski』第40号（2009年12月19日）、32頁。
- 小澤卓也『コーヒーのグローバル・ヒストリー：赤いダイヤか、黒い悪魔か』ミネルヴァ書房、2010年。

理事選挙管理委員会からのお知らせ
2010年4月に理事選挙を実施します。郵送による投票になります。会員の皆様には4月上旬に投票用紙などをお送りします。投票期間は2010年4月12日（月）～4月28日（水）です。学会名簿作成後に住所が変わった方は速やかに住所変更の届け出をお願いします。

●このたび、本学会員の若手研究者の国際交流を支援する「日本ラテンアメリカ学会若手支援制度」が発足しましたので、ご案内申し上げます。該当する会員はふるってご応募ください。

1. 目的：

本学会員の若手研究者を支援し、国際交流に資すること。

2. 対象：

国際学会（海外）での報告を目的とする旅費の補助。

「旅費」には宿泊費を含むが、食費等滞在費一般は含まない。

助成対象は各会計年度3名を目安とする。

3. 補助額：

1人あたり10万円以内。国際学会報告実施後に支給。

4. 申請資格：

申請時点で会員歴2年以上。

年齢：原則として35歳以下。

職業：常勤職に就いていないこと。

5. 申請時期：

国際学会開催の1ヶ月前まで。

6. 申請時の提出書類：

①学会の定める申請書。

②申請者の氏名や発表題目が記載されたプログラム、または申請者に対する招聘状など予定されている報告を主催者が証明するもの。

*申請書類は学会事務局に郵送してください。

7. 助成を受けるための条件：

国際学会での報告後3ヶ月以内に下記の書類を提出。

①国際学会参加記録、あるいは当該学会報告要旨あるいは全文（本学会『会報』あるいは『年報』用の原稿として）

②旅費にかかわる領収書（コピー不可）および航空券の半券。

8. 選定：

①各会計年度に2回を目処に助成対象候補者を集約し、理事長・会計担当理事・国際交流担当理事の3名により書類審査にて決定。

②応募者が同一会計年度に3名を超える場合、あるいはすでに助成を受けた経験のある者の処遇等についても、上記3名の判断により柔軟な対応を試みる

③選定結果については、『会報』にて全会員に告知する。

●問合せ先：石橋純（国際交流担当理事）
isibasi@ask.c.u-tokyo.ac.jp

*様式は11～12頁に掲載。学会HPからダウンロード可能。

編集後記

本号は会員の研究活動満載である。各研究部会の活動報告と活動予告のあと、若手支援制度についてアナウンスが続く。6月初旬の第31回定期大会（京都大学）の準備も着々と進んでいる。このように研究活動の進展を図ることこそ、本学会のミッションである。『会報』がその一翼を担っていることを嬉しく思う。（落合一泰）

No.101 2010年3月31日発行

学会事務局

〒102-8554

東京都千代田区紀尾井町7-1

上智大学イペロアメリカ研究所

Tel: 03-3238-3530

Fax: 03-3238-3229

E-mail: tani-hi@sophia.ac.jp

日本ラテンアメリカ学会若手支援制度申請書

年 月 日記入

氏 名		生年月日	年 月 日
所 属	現在の所属機関・職名		
	(院生の場合)	大学	研究科 課程 年
連 絡 先	(〒 -) メールアドレス：		
	TEL：	FAX：	
発表予定学会名 英語・スペイン語・ポルトガル語以外の場合は和訳を付記			
学会開催年月日	年 月 日	～	年 月 日
開催場所	国名	都市名	
	会場名		
旅行費用	総額	(内訳：運賃 滞在費)	
	主催者等から費用の一部を支弁されている場合はその金額		
発表タイトル 英語・スペイン語・ポルトガル語以外の場合は和訳を付記			
発表の要旨			

学 歴	
-----	--

職 歴	
-----	--

	著書名または論文名	発行所または掲載誌名	年
発表テーマに関連した業績 (2点まで)			

審査担当委員 所 見	
---------------	--

※申請資格 (事務局で記入)	会員歴： 年入会	会費納入状況： 年度まで完納	
	本学会からの助成受領経験： 年に	円を受領	